

第 59 回大会を終えて

教育史学会第59回大会は、宮城教育大学を会場に、2015年9月26日(土)・27日(日)に開催されました。前日25日(金)には、理事会・紀要編集委員会・書評委員会も開催されました。この日程は例年よりも一週間ほど早い開催でしたが、後ろに持っていくと本学の大学院入試や学内行事とぶつかってしまうという理由からでした。日程を確定した後に慌てたこともありまして。9月19～23日のうちの4日間、仙台でアイドルグループ・嵐の20万人復興支援コンサートが開かれることが報道され、各種イベントが中止になったり、他学会の日程が変更になったりすることが相次ぎました。後ろにずれ込むと当方の宿の手配ができなくなる恐れがあり、やや気を揉んだ次第です。復興支援とはいえ、まさに「嵐」が吹き荒れた9月後半でした。

大会の2日間は、長く仙台に住んでいる者にも、動き回るとうっすらと汗をかき、一方で肌寒さも感じるような、微妙な天候でした。キャンパスは青葉山の上であって平地よりも1度ほど気温が低いのですが、それよりも何よりも、仙台駅から交通手段はバスしかなく、2日目の朝には混雑して予定した便に乗りなかつた方々がいたと聞きました。これこそ冷や汗もので、案内の不備をお詫びしなければなりません。

参加者総数は207名(一般会員162名、臨時会員10名、院生会員24名、臨時院生会員11名)でした。地方での大会として少ない人数ではなかったと思いますが、院生会員の参加者が少なかったことがやや気になりました。昨年度が $77/351=22\%$ でしたので、それよりも低いことになります。とはいえ、各大学で大学院入試等の行事が組まれていたにもかかわらず、ご参加いただいた会員の方々には御礼申し上げます。

会場は、受付、分科会、総会・シンポジウムのすべてを2号館に集中させました。移動が少なくて済むようにコンパクトな会場設定を心掛けました。研究発表の申し込みは52件でした。これを内容の傾向性に即して12分科会に分けました(初日午前が6分科会、2日目午前が4分科会、午後が2分科会)。2日目午後に2分科会を設けたのは(午前に回してもよかったのに)、多数の参加者が期待できる分科会をここに持ってくることで、コロキウムへの誘導を図ろうとしたからに他なりません。これは目論見どおりでしたが、一方で、東洋(1分科会)と西洋(2分科会)の研究発表申し込みが少なかったために、西洋分科会の一つではイギリス2件、アメリカ2件、ロシア1件という構成になってしまう事態が生じました。司会者については、大学院入試やオープンキャンパス等の校務や先約によって断られるケースが相次ぎ、最終的に確定したのが8月半ばでした。理事の方々の協力もあり、何とか司会者を確保すること

ができました。大会前日に司会者変更を余儀なくされる事態もありましたが、準備委員が入ることで何とか対応することができました。

シンポジウムは「教育史研究と教師の教養形成」というテーマで、170名前後の参加者を得て、実施いたしました。準備の過程では別のテーマも提案されましたが、会場校の特徴を踏まえて考えようということで、今回のテーマとなりました。けっして新しいものではなく、かつて提起され、その後の検証が不十分なままにされたテーマであることは、冒頭でご説明したとおりです。中教審教員養成部会の答申案(本年12月答申予定?)を読むにつけ、教師教育(教員養成)の危機的状況が止めどなく進行しているのを強く感じさせられます。教育史研究が如何なる貢献ができるのか、そのことを考えるきっかけになればという想いを一層強くしている次第です。

懇親会は106名(ご招待を含む)の参加者を得て行われました。参加者数の予測には毎回頭を悩ますようですが、幸い今回は赤字を出すことなく済みました。ご当地色を出すために、料理は三陸産ムール貝白ワイン蒸、宮城森林鶏の油淋鶏、牛タン焼き、ずんだ餅などを用意し、飲み物はビール、山形産ワイン(赤白)、ソフトドリンク、日本酒を用意しました。準備委員会企画として日本酒バーを用意して、宮城県産純米大吟醸酒4合瓶5種を各1本用意しました。おおむね好評だったようでホッとしています。

コロキウムは三つの企画で実施されました。正規のプログラムのなかに組み入れるタイム・スケジュールを今回も踏襲しました。準備委員会として正確な数字は把握しておりませんが、100名前後の方々が参加されたのではないかと観ております。

学生諸君の協力なしに、大会当日の運営を行うことはできなかったことも申し添えておきます。幸いに複数の方からお褒めのことをいただきましたので、改めて学生諸君に伝えておきたいと思います。また、宮教大には教育史学会の会員が2名しかおらず、近隣大学の会員諸氏に準備を手伝っていただきました。改めて準備委員を紹介しますと、泉山靖人(東北大学)、大迫章史(仙台白百合女子大学)、金井徹(尚絅学院大学)、佐藤幹男(石巻専修大学)、清水禎文(東北大学)、八鍬友広(東北大学)、山谷幸司(仙台大学)の各氏、そして事務局長の佐藤哲也(宮城教育大学)さんと笠間の9名になります。とくに事務局長の佐藤さんは、大会運営のすべてに細やかな気配りを行い、万端遺漏なく準備にあたってくれました。身内のことで手前味噌にはなりますが、この場をお借りしてご紹介しておきます。その完璧さは舌を巻くほどでした。

第59回大会準備委員会 委員長
笠間 賢二(宮城教育大学)

2015年9月26日午後1時15分より、宮城教育大学2号館220教室において第59回大会年度の総会が開催された。まず新谷恭明代表理事より、続いて大会準備委員会委員長・笠間賢二会員より挨拶があった。議長団として佐藤哲也会員・遠藤孝夫会員が選出され、議事が進行された。審議事項は全案件が原案通り承認された。出席人数は76名。

【報告事項】

1. 第58回大会年度会務報告

事務局より以下の会務報告がなされた。

(1) 第58回大会年度中の会員異動

(2014.9.1～2015.8.31)

年度当初会員数 898名 入会数18名 退会者数36名 年度末会員数 880名

(2) 第58回大会の開催

2014年10月4日・5日に日本大学文理学部で開催された。参加者数は351名であった。

(3) 『会報』の発行

2014年11月25日、および2015年5月25日に『会報』を発行した。

(4) 機関誌編集委員会選挙の実施

機関誌編集委員会選挙を2015年7月15日公示、7月28日を投票締切とし、8月7日に開票を行った。なお、結果については「報告事項2」にゆずる。

(5) 『日本の教育史学』第58集の刊行

2014年10月1日付で発行した。発行部数1,160部。

また、『日本の教育史学』をJ-STAGEに登載するための準備を進めた。

(6) 国際化促進

海外主要国のナショナルライブラリーに「日本の教育史学」第57集を寄贈した。

2014年12月、立教大学において、ISCHE（国際教育史学会）・フックス会長との懇談をもった。

2015年6月24～27日にイスタンブールで開催されたISCHE第37回大会に、オブザーバーとして山崎洋子会員に参加いただいた。

2015年8月23～29日に中華人民共和国・済南市において開催された第22回国際歴史学会議に、一見真理子会員・新保敦子会員を派遣した。

(7) 他学会との共同

2015年3月14日に開催された、教育関連学会連絡協議会主催・公開シンポジウム「教師教育の現在と未来」について、会員に周知を図った。

(8) 名簿の作成

2014年11月に名簿を刊行した（3年に1度）。

(9) ホームページの更新

ホームページのリニューアルを行った。また、ホームページ更新の外部委託を止め、事務局にて管理することとした。

(10) メールマガジンの創設

会員向けのメールマガジン「教育史学会メールニュース」発行に向けて、準備を行った。

(11) 理事会の開催

第1回 2015年3月28日 立教大学池袋キャンパス
報告事項 会務報告／教育関連学会連絡協議会運営委員会／「日本の教育史学」第58集編集経過およびJ-STAGE移行について／「日本の教育史学」第58集の書評編集経過について／第58回大会決算報告／第59回大会準備状況／国際交流委員会より／第60回大会開催校について／その他
審議事項 第59集書評委員の選出について／学会機関誌英文表記の改定について／国際交流委員会からの提案について／学会ホームページのリニューアルについて／メールニュース（メールマガジン）の開設について／教育史学会創立60周年記念事業について／第6回日本学術振興会育志賞受賞候補者の推薦について／入退会者の承認／編集委員選挙について／その他

第2回 2015年9月25日 宮城教育大学

報告事項 第59回大会の準備状況について／会務報告／機関誌編集委員会選挙結果について／『日本の教育史学』第58集編集委員会報告／第5回教育史学会研究奨励賞選考結果について／『日本の教育史学』第58集書評委員会報告／第22回国際歴史学会議報告／その他

審議事項 国際教育史学会への加盟について／国際交流委員の委嘱について／海外特別会員の委嘱について／第58回大会年度決算（案）及び監査報告について／第59回大会年度事業計画と予算（案）について／CiNiiからJ-STAGEへの紀要第57集以前のデータ移行について／60周年記念事業について／入会・退会者の承認／第60回大会

開催校について／第5回研究奨励賞授与式
の実施について／総会の運営について／そ
の他

2. 機関誌編集委員会選挙結果について

選挙管理委員・泉山靖人会員より以下の選挙結果
(書評委員については選出結果)が報告された。

■第59・60集機関誌編集委員

井上恵美子	(日)	フェリス女学院大学
木村 元	(日)	一橋大学
坂本 紀子	(日)	北海道教育大学函館校
湯川嘉津美	(日)	上智大学
一見真理子	(東)	国立教育政策研究所
佐藤 由美	(東)	埼玉工業大学
宮本健市郎	(西)	関西学院大学
山名 淳	(西)	京都大学
今井 康雄	(一)	日本女子大学
大桃 敏行	(一)	東京大学

■第59集書評委員

大戸 安弘	(日)	横浜国立大学
木村 元	(日)	一橋大学
清水 康幸	(日)	青山学院女子短期大学
佐野 通夫	(東)	こども教育宝仙大学
新保 敦子	(東)	早稲田大学
尾上 政信	(西)	岡山大学
宮本健市郎	(西)	関西学院大学

3. 『日本の教育史学』第58集の刊行について

機関誌第58集を担当した委員会(米田俊彦機関誌
編集委員長)より以下の報告があった。

例年通り9月中旬に第58集を刊行できた。印刷所
の都合で執筆者に初校グラが届いたのが7月下旬に
なってしまう、大変ご迷惑をおかけした。

また、第58集よりJ-STAGE 登載が決定している。
刊行日6ヶ月経過後の来年4月1日より公開される。
掲載論文の執筆者には、J-STAGE 登載用の「引用文
献リスト」を提出いただいた。

4. 教育史学会60周年記念事業について

3月度理事会で設置された「教育史学会創立60周
年記念事業案検討ワーキンググループ」責任者の米
田理事より、検討内容について報告があった。

2016年5月3日が創立60周年記念日となるが、記
念事業として①記念出版物の刊行、②第60回大会時
に通常のシンポジウムとは別枠での国際講演または
シンポジウムの開催、の二つを検討中である。

①については、2000～2015年にかけての教育史研
究の動向を、いくつかのテーマを立てて明らかにす
る。出版物の編集にはワーキンググループメンバー
に何人かのメンバーを加えて編集委員会を構成する
こととなったので、今後会員各位のご協力をお願い
したい。

②については、次期大会校において準備を進めて
いただく。

【審議事項】

1. および2. 第58回大会年度決算および監査報告

八鍬事務局長より資料に基づいて説明があった。
当年度収支差額の赤字額が大きく見えるが、これは
過去の余剰金を計画的に減らすために会費を引き下
げた結果であり、予定通りのものである。引き続き
監査・高橋陽一会員および柏木敦会員より監査結果
について報告があった。審議の結果、第58回大会年
度決算が異議なく承認された。

3. 国際教育史学会への加盟について

八鍬事務局長より、資料に基づき以下のような提
案があった。

理事会として昨年度より、国際教育史学会
(International Standing Conference for the
History of Education: ISCHE)への加盟を検討し、
国際教育史学会会長との懇談、総会へのオブザーバー
参加などを行ってきた。

教育史研究の促進、教育史研究者の国際交流・情
報交換・相互協力の促進などの目的のため、国際教
育史学会への「機関会員」として加盟することを理
事会において決定した。他団体への加盟であるので、
総会場でお諮りしたい。

審議の結果、異議なく承認された。

4. 第59回大会年度予算について

八鍬事務局長より資料に基づいて予算案について
説明がなされ、異議なく承認された。

5. 第60回大会について

八鍬事務局長より、次回第60回大会について横浜
国立大学で開催したい旨提案がなされ、異議なく承
認された。

以上をもって議事はすべて終了した。審議事項5
を受けて、第60回大会開催校である横浜国立大学・
大戸安弘会員よりメッセージ(八鍬事務局長代読)
をいただき、閉会した。

第 58 回大会年度決算報告

収支計算書 (2014. 9. 1～2015. 8. 31)

収入

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
会費	58回年度個人会費	3,825,000	3,812,000	-13,000	5000*757名 3000*9名 納入率85.5%
	過年度個人会費	500,000	537,000	37,000	6000*3名 5000*102名 3000*3名
	小計	4,325,000	4,349,000	24,000	
機関誌等 販売収入	機関誌販売収入	264,600	293,706	29,106	3,780円*0.7*111冊
	50周年記念誌販売収入	5,000	4,750	-250	250円*19冊
	小計	269,600	298,456	28,856	
雑収入	受取利息	1,200	1,094	-106	
	情報・システム研究機構	0	0	0	
	小計	1,200	1,094	-106	
当年度収入合計 A		4,595,800	4,648,550	52,750	
前年度繰越金 B		10,139,919	10,139,919	0	
収入総計 C = A + B		14,735,719	14,788,469	52,750	

支出

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	1,150,000	0	第58回大会 (日本大学文理学部)
編集費	機関誌刊行費	740,880	740,880	0	第57集印刷費 (1,160部) 686,000+消費税
	編集複写費	10,000	10,230	-230	コピー代
	編集交通費	550,000	423,630	126,370	編集委員会交通費416,810
	編集会合費	50,000	38,272	11,728	委員会昼食代 @1,000
	編集通信費	40,000	35,661	4,339	投稿案内8,282 書評委員会4,047
	編集消耗品費	5,000	12,996	-7,996	コピー用紙、ラベル用紙、事務用品
	編集謝金	100,000	56,000	44,000	英文校閲 @8,000*7本
	編集人件費	200,000	200,000	0	編集幹事謝金
	編集雑費	5,000	0	5,000	
	書評等原稿謝金	15,000	10,000	5,000	非会員2名*@5,000
	書評用図書購入費	70,000	70,000	0	書評委員 @10,000*7人
	振込手数料	1,500	1,080	420	
	電子ジャーナル公開 関連費	100,000	0	100,000	
	小計	1,887,380	1,598,749	288,631	
事務局経費	人件費	860,000	860,400	-400	嘱託840,000 アルバイト20,400 (大会受付)
	旅費交通費	600,000	423,790	176,210	理事会312,650
	会合費	40,000	5,055	34,945	会議茶集代
	奨励賞関係費	110,000	107,654	2,346	第4回研究奨励賞副賞50,000*2名 賞状・式次第印刷費
	通信運搬費	500,000	466,865	33,135	会報送費 (116・117号) 238,670 機関誌送費160,920
	消耗品費	50,000	43,004	6,996	ソフトウェア、事務用品、 プリンタインク等
	印刷製本費	200,000	230,602	-30,602	会報印刷費 (116・117号) 187,110 封筒印刷費33,480
	手数料	60,000	56,712	3,288	振替手数料
	H P管理運営費	80,000	39,804	40,196	OCN レンタルサーバー代
	名簿刊行費	240,000	237,600	2,400	名簿1,100部
	小計	2,740,000	2,471,486	268,514	
国際化促進関係費	旅費交通費	600,000	444,015	155,985	国際交流委員会旅費、国際会議派遣費
	謝金	50,000	73,000	-23,000	英文校閲謝礼
	会場費	0	0	0	
	印刷代	20,000	0	20,000	
	通信運搬費	20,000	13,640	6,360	紀要海外寄贈送料
	会合費	20,000	2,095	17,905	国際教育史学会会長との懇談
	消耗品費	10,000	1,588	8,412	封筒代
	小計	720,000	534,338	185,662	
雑支出	雑支出	10,000	0	10,000	
予備費	予備費	100,000	10,000	90,000	教育関連学会費
当年度支出合計 D		6,607,380	5,764,573	842,807	
当年度収支差額 A-D		-2,011,580	-1,116,023	-895,557	
次年度繰越金 E = C - D		8,128,339	9,023,896	-895,557	
支出総計 D + E		14,735,719	14,788,469	-52,750	

貸借対照表 (2015.08.31現在)

資産

単位：円

費目		金額	備考
現金	現金	0	
預金	郵便振替口座	2,264,731	
	ゆうちょ銀行	763,584	
	ゆうちょ銀行定額貯金	5,000,000	
	みずほ銀行	5,195,946	
	小計	13,224,261	
前払・仮払	大会仮払金	1,150,000	第59回大会 (宮城教育大学)
立替・未収金		0	
資産総計 F		14,374,261	

負債・積立金および繰越金

単位：円

費目		金額	備考
前受金	59回年度会費	50,000	5000*10名
	60回年度会費	5,000	5000*1名
	小計	55,000	
未払金		295,365	国際会議派遣費
積立金	将来計画積立金	5,000,000	ゆうちょ銀行定額貯金
負債・積立金合計 G		5,350,365	
第59回大会年度への繰越金 $H = F - G$		9,023,896	
負債・積立金・繰越金総計 $G + H$		14,374,261	

会計監査報告

第58回大会年度会計につき監査を実施し、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認しました。

2015年9月19日

監査 柏木 敦 ㊞

監査 高橋 陽一 ㊞

第 59 回大会年度予算

収入

単位：円

費目	予算	58回決算	備考
会費			
59回年度個人会費	3,740,000	3,812,000	5000*880名*85%
過年度個人会費	500,000	537,000	
小計	4,240,000	4,349,000	
機関誌等 販売収入			
機関誌販売収入	264,600	293,706	3,780円*0.7*100冊
50周年記念誌販売収入	2,500	4,750	250*10冊
小計	267,100	298,456	
雑収入			
受取利息	1,000	1,094	
その他雑収入	0	0	
小計	1,000	1,094	
当年度収入合計 A	4,508,100	4,648,550	
前年度繰越金 B	9,023,896	10,139,919	
収入総計 C=A+B	13,531,996	14,788,469	

支出

単位：円

費目	予算	58回決算	備考
大会費			
大会運営費	1,150,000	1,150,000	第59回大会（宮城教育大学）
編集費			
機関誌刊行費	699,840	740,880	第58集印刷費（1,160部） 648,000+消費税
編集複写費	10,000	10,230	
編集交通費	500,000	423,630	
編集会合費	40,000	38,272	
編集通信費	40,000	35,661	
編集消耗品費	10,000	12,996	
編集謝金	80,000	56,000	英文校閲 @8,000
編集人件費	200,000	200,000	
編集雑費	5,000	0	
書評等原稿謝金	15,000	10,000	非会員謝礼 @5,000
書評用図書購入費	70,000	70,000	書評委員 @10,000
振込手数料	1,500	1,080	
電子ジャーナル公開関連費	100,000	0	J-STAGE登載関連費用
小計	1,771,340	1,598,749	
事務局経費			
人件費	860,000	860,400	嘱託840,000 大会アルバイト20,000
旅費交通費	500,000	423,790	理事会交通費400,000
会合費	10,000	5,055	
奨励賞関係費	60,000	107,654	奨励賞副賞50000*1 賞状・式次第印刷費
通信運搬費	550,000	466,865	会報発送費、機関誌発送費、 投票用紙発送費用
消耗品費	50,000	43,004	ソフトウェア購入、プリンタインク等
印刷製本費	350,000	230,602	会報印刷費170,000、理事選挙関連100,000
手数料	60,000	56,712	
H P 管理運営費	80,000	39,804	レンタルサーバー代、HP管理費
名簿刊行費	0	237,600	
小計	2,520,000	2,471,486	
国際化促進関係費			
旅費交通費	200,000	444,015	国際交流委員会旅費
謝金	50,000	73,000	英文校閲等
国際学会関連費*	30,000	0	国際教育史学会年会費（100ユーロ） 他
印刷費	10,000	0	
通信運搬費	20,000	13,640	
会合費	10,000	2,095	
消耗品費	10,000	1,588	
小計	330,000	534,338	
60周年記念事業費			
準備費	100,000	0	会議旅費・通信費
雑支出			
雑支出	10,000	0	
予備費			
予備費	50,000	10,000	
当年度支出合計 D	5,931,340	5,764,573	
当年度収支差額 A-D	-1,423,240	-1,116,023	
次年度繰越金 E=C-D	7,600,656	9,023,896	
支出総計 D+E	13,531,996	14,788,469	

教育会史研究 新たな研究視点の浮上

近代日本における教育情報回路と教育統制（4）

―戦後の展開―

梶山 雅史（岐阜女子大）

本コロキウムは、2005年第49回大会以来、“教育情報回路としての教育会の総合的研究”をテーマとして企画し、第11回目を迎える。今回は戦後新教育への転換期を対象とした。1948（昭和23）年8月、日本教育会総会における解散決議（138対51）によって、「大日本教育会」結成以来65年の歴史をもつ中央教育会が終焉をむかえた。この日本教育会解散に反対し、中央教育会存続の立場をとる東京都教育会、信濃教育会ほか数県の教育会が、翌年11月に教育会連合体としての「日本教育協会」を結成。さらに1952（昭和27）年には加盟県市を増やし「日本連合教育会」と改称して今日に及んでいる。占領政策下、戦後新教育への転換をめざす大きな過渡期において、各県地方教育会はそれぞれどのような動きをとったか。教育会がそれまで担ってきた諸機能は戦後どのような形態・方式・組織に組み替えられていくのか。教育会の戦後の展開について新たなスポットを当てることとした。

梶山から昨年のコロキウム報告の経緯を踏まえた趣旨説明を行った後、白石崇人会員、佐藤幹男会員の2報告があり、報告を受けて自由な論議、意見交換を行った。

一．白石崇人報告「日本教育会解散後における中央教育会の再編 ―日本教育協会・日本連合教育会成立まで―」 新史料を用いて、（一）日本教育会の再改組から解散へ（教育会・教職員組合の両立、教職員組合の教育会解散要求、日本教育会の解散）、（二）中央教育会の「存続」（都道府県教育会連合体としての日本教育協会、職能向上・教育研究機能のゆくえ、国際的役割の模索と挫折、日本連合教育会の成立）について、その経緯を詳細に明らかにした。新たな成果としてつぎの四点を考察のまとめとした。①中央教育会の再編には、日教組や文部省・占領当局の主導だけでなく、信濃教育会等地方組織の意向が強く反映した。②1950年代に継承された中央教育会の機能（伝統）とは、都道府県教育会間の連絡機能、校長・退職教員や教育関係者の幅広い団結、職能向上・教育

研究事業、国際的役割を果たす代表機能であったが、いずれも現実的展開には限界が生じている。③日本教育会解散後の中央教育会再編は、日教組や地方に教育研究機能強化への取り組みを促す影響をあたえた。④1940年代後半の中央教育会再編は、政治における教育の専門性・権威の揺らぎに直面する中で、教育会連合体の共同意識・団結力を高めるために1952年日本連合教育会成立へと帰結するに至った。いずれも先行研究の未使用史料に基づく新鮮な知見が提起された。

二．佐藤幹男報告「「教育会」の遺産は戦後にどう継承されたのか」

（一）戦前における教育会の最大の使命は、教員の資質向上にあった。教育会は教員「研修」のために作られたシステムであり、教員の資質を管理するシステムであった。そして教員研修システムは基本的に校長、校長会によって担われたといえる。戦後、教育会の多くは解散した。しかし、教員研修の担い手であった校長の大半は、そのまま現場に残り、戦後初期においても、学校や地域における教育研究活動、教員現職研修の指導や組織化に奮闘した。教育会という看板はなくなったが、校長・校長会が教員研修の中身を担うというシステムはそのまま残り、戦後に継承されている。戦前の教育会と校長会は一体どのような関係にあったのか。戦前の校長会はいつ頃から組織され、どのように国あるいは府県の政策や行政に関わってきたのか、それは、戦後の校長会と同じなのか違うのか。校長層・校長会の機能について重要な問いが提出された。

（二）戦後初期、城戸幡太郎は、教育研究所を中心とした教員養成、再教育システムの構築等を内容とした中央、地方を結ぶ教育研究所構想を提言した。この案を契機に各地に教育研究所が設置され、それらは1960年代以降、研修センターに改組されていく。研修センターは各県の教員現職研修システムの中核機関として機能しているという点で、その前身である教育研究所も教育会に代る現職研修システムとして構想されたのかどうか。城戸構想の意義と限界また玖村敏雄の「教育研究協議会」の試み等も再考察すべきとの課題提起がなされた。

二つの報告後、活発な討議が行われたが、二点に

絞って紹介したい。

1) 坂本紀子会員から、1948年8月、日本教育会解散が決議された総会直後において、7都県（茨城、栃木、東京、長野、愛知、徳島、鹿児島）の教育会が中央教育会の存続を図ることを申し合わせているが、7都県と他県の教育会は何が違っていたのか、何を中央教育会に求めていたのかとの問いを皮切りに、7都県それぞれの戦前戦後を詳しくたどり、なぜ教育会が存続したのか、丁寧に検証することが継続課題となった。その際1948年の教育委員会法公布（公選教委）、1956年の地方教育行政法案強行可決（任命制教委）への変遷、教育委員会との位置関係、勤務評定実施、教員組合の動向など各時点の状況・背景を踏まえる必要がある。さらに1949年日本教育協会結成から1952年日本連合教育会への改称、その後12都県4市の教育会が加盟し今日にいたっている日本連合教育会の歩みについて研究を深め、教育会の現代的変容状況を把握することが必要である。

2) 教育会における校長会の役割分析について、戦前の小学校長の登場・小学校長会の結成は実態としていつ頃からであったか。明治33年に法令上、小学校に必ず校長をおくこととされたが、実態としての校長の検証は教育行政学の先行研究でも意外と明確でない。県校長会が全国的に実際に結成されたのはいつからであったか。その検証作業の裏打ちが必要であるとの問題提起が千葉昌弘会員からなされた。討議のなかで、それは郡制廃止、郡役所や郡視学が廃止される大正末年から昭和初年ころかと思われるが、県によっては違いが見られ、福井県では明治41年、福島県では大正15年との記録がある。また戦前の校長会について全く記載なしの県もあるとの指摘。また戦前の校長会には、県学務課が招集する校長会議と校長達の自主的会合としての校長会の二種があり、あらためて各県の校長会の性格、機能に即して校長会の位置づけを吟味する必要があるとの提言。学校日誌に時代が下がるとともに教育会と校長会が重なる記録が多くなるとの史料紹介。さらに『長野市教育会史』には昭和10年代の戦時体制に入ってから、「校長会と教育会の活動は渾然一体」となったとの叙述紹介等々、多くの発言があった。教育会において校長会が果たした役割の本格的な分析があらためて大きな研究課題となることを共通確認した。

今回も刺激的な「仮説」と称する挑発的報告を受けて、実に有意義な討議が実現した。討議を通じて

また新たな課題が大きく膨らみ、今日の状況にかかわる研究課題の重さを強く感じたコロキウムとなった。22名の参加者があり、遅くまで参加していただいた方々、終了時刻をオーバーして討議をさせていただいた会場校の担当者の皆様に心からお礼を申し上げます。

「戦時下における教育史学の帰趨

—海後宗臣を中心として—」を終えて

斉藤 利彦（学習院大学）

本コロキウムは、斉藤利彦・森川輝紀（福山市立大学）をオルガナイザーとし、司会を逸見勝亮（北海道大学・名誉）、研究報告を斉藤「戦時下における海後教育史研究の展開とその帰趨」、高橋陽一（武蔵野美術大学）「海後教育史学の再検討と教育類型史観」、清水康幸（青山学院女子短期大学）「海後教育史学における近代学校批判の契機」の三名が行い、さらに指定討論者として寺崎昌男氏（東京大学・名誉）を迎えて行われた。当日は多数の会員の参加を得て、テーマを深める活発な議論が展開された。

本年、期せずして海後の大量の未公開原稿「1944年版教育史」（仮称）が発見されたが、これにより、我々は海後の15年戦争の時期の最初から最後に至る通史的著作、すなわち、「明治初年に於ける教育の調査研究」（1931年）、『日本近代学校史』（1936年）、『日本教育史（最近世）』（1938年）、『日本教育小史』（1940年）、『学制七十年史』（1942年）、そして「1944年版教育史」を検討できる地点に立つことになった。これらを比較分析することによって、海後の戦前における教育史叙述の展開を実証的に跡づけ、かつその変化あるいは変質、さらにはそれがいつ起こり始めたのか、それは何故で、いかなる経緯をとまなうものであったのかを検討することが可能となった。それは、まさに戦時下における教育史学の帰趨の一つの端的な事例の解明につながるものと思われる。

こうした問題提起のもとで、議論の中では多様な論点が提示された。「44年版教育史」の歴史的位置づけの問題に始まり、海後における元田永孚研究との連続性、「大東亜建設審議会」答申で打ち出された「大東亜諸民族ノ化育方策」（1942年5月）に基づく「化育」概念（海後が先導的に用いたとされる）の由来、中学・高校時代に海後が日曜学校の教師をしていたことの意味、海後の祖父であり「桜田門外の変」の「桜田一八烈士」の一人であった海後礎之介宗親の尊皇思想との関連、さらには「国体」思想と教育史認識等について、フロアからの発言を含

む様々な知見が提起された。

戦後70年の年に行われた、こうした議論の一つの出発点として、あらためて戦前における教育史学とは何であったのか、さらには戦前と戦後の連続性と非連続性が、我々の課題として問われなければならないだろう。

「帝国大学体制」とは何だったのか

堀之内 敏恵（岩手県立大学）

「帝国大学体制」とは、酒井豊・寺崎昌男・（中野実）氏が『日本近代大学成立期における国家、学術体制ならびに大学の関連構造に関する研究』（1989）で提示し、その後、中野氏が『近代日本大学制度の成立』（2003）所収の論考等で用いたことにより普及するに至った「概念」である。本コロキウムは、中野氏がイメージしていた「帝国大学体制」の射程を再検討しつつ、この場を活用して、関連研究者にイメージを開陳していただき、新たな概念規定に向けての課題と方法を共有できればと考え設けた。この「概念」による問題設定を明らかにすることで、今後の「帝国大学」研究の伸展に向けて示唆を得ることが目的であった。

当日は、オーガナイザーの堀之内が趣旨説明を行った後、ご多忙の為誌面での参加をご快諾頂いた瀧井一博氏（国際日本文化研究センター）、折田悦郎会員（九州大学）からのコメントペーパーも紹介しつつ、類似概念との比較による「帝国大学体制」の焦点【A：帝国大学内部の制度、組織編成、B：知、学問・学術の内容、C：ネットワーク（軍・産・官・民）、D：諸大学のヒエラルキー、E：進学体系の頂点（アーティキュレーション）】と編成・機

能上の最大画期【帝国大学令公布、第二・第三の帝国大学の登場、大学令公布、戦時期】を提示し、『帝国大学体制』を使用した主な論考等一覧」（書評類も含めて22論考）を用いてその「含意」を検討した。

次に、指定討論者の吉川卓治会員（名古屋大学）より、上述の「帝国大学体制」の焦点に即して、中野氏における「帝国大学体制」研究の変遷、および「大学令公布」期を中心としたその射程について、コメントを頂いた。

共同企画者の田中智子会員（同志社大学）は「帝国大学」誕生前後において、「民間勢力が新たな『大学』をつくること（「私立大学」の設置）が、各方面（中央官財界）にどのように捉えられたかについて、同志社大学設立運動を素材として検証した。そして、民間勢力がいきなり「大学」をつくることは考えにくく、中等教育レベルの問題から派生しているとして、焦点でいえば、D×Eの側面が強いことから、私学に即して考えた場合は、むしろ「諸学校令体制」という捉え方のほうが理解しやすいと述べた。

ご参加いただいた会員からは様々のご質問、ご意見を頂いた。一つ挙げれば、「帝国大学体制」の焦点B～Eがどのような比重・掛け合わせになっているかが重要で、そこに日本の高等教育の特徴があり、国際比較の可能性が広がる点が指摘された。国際比較の重要性は他の参加者からも強調された点である。ご指摘を踏まえて、今後の研究を進展させていきたい。

企画者側の報告が長くなり、参加者からご意見を頂く時間を十分に取れなかった点を反省するとともに、長時間にわたりご参加くださった会員のみなさまに御礼申し上げます。

【第5回教育史学会研究奨励賞授与式】

2015年9月26日（土）、教育史学会第59回大会総会に先立ち、「第5回教育史学会研究奨励賞」の授与式が行われた。受賞者と授与論文は以下の通り。（敬称略）

杉浦由香里

「三重県阿山高等公民学校の発足」

受賞者の杉浦由香里会員には、新谷代表理事より賞状と副賞（賞金5万円）が授与され、受賞者スピーチが行われた。



大会参加記

教育史学会第59回大会に参加して

松浦 良充（慶應義塾大学）

「おやっ（めずらしいね）」という表情に何度も出くわすことになった。相当久方ぶりの大会参加であるから仕方がない。かれこれ30年、大学院生の頃からずっと会員であったが、申し訳ないことに最近はずっと足が遠のいてしまっていた。筆者はアメリカを主たるフィールドとして教育思想史や大学史に関心をもってきた。日本教育史関係が大勢を占めるプログラムには圧倒されししまう。もっとも西洋教育史分野の退潮は、筆者のような腰の引けた会員による悪循環によって生じているのだろうから、自己反省しなければならない。

このような後ろめたさを感じつつ会場に到着した。目的の教室を探してキョロキョロしていたところ、さっそく会場校の方が声をかけてくださった。ホスピタリティの行き届いた大会運営であった。会場校、学会事務局の方々のご尽力に心より感謝申し上げたい。

久々の大会参加には大きく二つの動機があった。一つはシンポジウムのテーマ、もうひとつは指導院生が複数発表するためであった。前者については、関係している教育哲学会、教育思想史学会でもとりくんできた課題であり、教育史学会でどのような議論が展開されるのかに興味があった。船寄会員の提案でいきなり拙論が引用されたことには驚いたが、だからというわけでは決してなく、同会員の主張には強い共感をもった。岩田会員、山崎会員の提案もそれぞれの観点から興味深い議論をされていたし、お二人の指定討論者の指摘も正鵠を射るものであった。ただ司会者のご尽力にもかかわらず、討議が拡散してもったいないとの印象をもった。個人的には、もう少し船寄会員の挑発に乗った形で、教育史にかかわる教育と研究の相克と連関、教師の「教養」ということの内実を教育史の観点から展望してゆく、という議論の展開になってほしいと思った。しかしそれはまたシンポジウムを通して、自らに突きつけられた課題でもあるので大いに成果はあったことになる。

指導院生の発表の場は、いつも自分の指導が試されているようで居心地が悪い。ここ数回継続的に発表させていただいている院生に加えて、もう一人今年はじめて当学会で発表させていただくことになった。筆者の指導学生であるので、どうしても思想史

志向が強い。教育史学会での発表ということで、二人とも「歴史」を意識するように、と言ってきているのだが、なかなか当学会の「文脈」にうまく軌道をあわせられていないように思った。ただ教育研究の現況を考えればもはや、これは「哲学（思想）」、これは「歴史（学）」といった議論は不毛であるようにも思った。教育事象の歴史的意味を解明するのが教育史の仕事だとすれば、狭いディシプリンにしがみつ়く必要はない。特に若い世代においては。久々の参加だったからこそ、考えることがさまざまあった収穫の多い大会であった。

第59回大会参加記

和崎 光太郎（京都市学校歴史博物館）

大会前から、シンポジウム「教育史研究と教師の教養形成」がどのような内容になるのか、気になっていた。適切な表現ではないかもしれないが、あたかも後衛部隊が前衛に立とうとしているような印象だった。というのも、かたや教育方法学や教科教育学といった実践的な教育学（＝前衛）があり、かたや、そこで用いられている概念、価値、やっていることなどの正当性を史的に検証する基礎科学（＝後衛）としての教育史学がある。「教師の教養形成」という実践に、基礎科学としての教育史学が直接的にどのように貢献するのだろうかと、思ったからである。

このような、「学会の自分探し」とでも言いうるテーマは昨年度からの引き続きであり、シンポジウムの会場で何か新しいものが生まれるのでは、という緊張感があった。私のような若輩者、しかも博物館学芸員として日々「前衛」と「後衛」を行ったりきたりしている者にとっては、当日の報告と指定討論はとても刺激的だった。

その報告と指定討論に傾きながら、あらためて自分なりに考えた。大学生や現職教員が、大学、博物館、新聞のコラムや雑誌記事、書籍、教委主催の塾や研修などで学ぶ教育の歴史を〈教育史〉と呼ぶならば、そもそも〈教育史〉とはいったい何なのだろうか、と。幸運なことに、質問をする機会もいただいた。しかし、結局頭の中で上手くまとまらず、さしあたり以下のような個人的結論に達した。〈教育史〉とは、単なる「教育についての実証された歴史」である以上に、学習者の脳内にある「あたりまえ」が

崩され、「なぜ」が想起され、すぐに役立たなくても生涯学習を続ける中でその土台・補助としてじわじわと役立つ知または思考の枠組み、なのだろう。

ともかく、シンポジウムに参加してこれほど必死に思考を巡らせたことはなかった。この文章を書いている今（9月29日）も、巡らせていた思考が収束する気配がない。会場で多くを学ぶことができた上に、日々の仕事や研究においてメタ認知的に考え続けるべき大きな課題を、与えていただいた。

コロキウムは、『帝国大学体制』とは何だったのかに参加した。その名の通り中野実氏発の概念を問うのだが、その概念がタイトルで「だったのか」とすでに過去のことにされているところに惹かれた。報告も会場からの質問も、非常に興味深く学ぶところの多い内容だったが、最後はタイムオーバーとなり、議論の魅力的な素材がいくつか現場に置き去りになったのが勿体なかった。

個別発表は、「高坂正顕の歴史観」が特に心に残った。発表後の質疑応答が教育思想史・教育哲学の方法論にまで及んだことは、この発表の持つ可能性の大きさを示唆しているのだろう。学会が新たな「自分探し」を試みている今こそ、思想史や哲学といった領域横断的な個別発表が、該当領域すべてを包み込む大きな枠組みでの議論に発展する可能性に満ちた時なのかもしれない。そのような時に発表できなかった自分の未熟さを、反省している。

第59回大会に参加して—英語と裁縫—

樋浦 郷子（帝京大学）

初めて教育史学会に参加したのが2005年の東北大学だった。10年前と同じような霧雨の中、バスで東北大学を通過しながら、年月とさまざまな出会いを感慨深く思った。

1日目第3分科会の「岡倉由三郎の『国際語としての英語』をめぐる思想と行動—1930年代初めのベーシック・イングリッシュの受容を中心にして」（平田諭治会員）で、晩年の岡倉が、「ベーシック・イングリッシュ」に傾倒していったことを学んだ。1930年代の社会状況の中で「教養としての英語」は居場所を狭めていった。岡倉は、人生の集大成ともいえる時期に、あまりに理想とは遠い社会で、絶望の淵に立っていたのではないかと夢想する。岡倉は以前、エスペラントの小学校教育への導入に前向きだった（岡倉『英語教育』、博文館、19—20頁、1911年）。しかし晩年それを否定し、あくまでも「簡易化された英語体系」たるベーシックに傾倒したの

は、帝国主義者でありナショナリストである岡倉にとって「国際語」は大英帝国の言葉に淵源すべきだ、との確信に至ったということだろうか。岡倉の置かれた状況や思想が解明されるほど、どこか侘しい心持ちになる（それは違うと、平田会員や岡倉に笑われるかもしれないけれど）。

2日目第5分科会の「日本統治期台湾の高等女学校における裁縫科教育—台北州立台北第三高等女学校を例として—」（滝澤佳奈枝会員）では、台湾風の制服のボタンを和風に取り換えたという事例から、アイデンティティ形成とそれを抑え込む権力について考えさせられた。私の専門とする朝鮮も和裁とは異なる繕い方をするのだが、台湾も独自の裁ち・縫い・繕いがある。

そういえば岡倉由三郎は、英語学習は裁縫ほど「実地的」ではないために、裁縫を学ぶほどうまくはいかないと考えていた（岡倉同上書、31頁）。こんにちよりも圧倒的に日常性を持った裁縫が「裁縫科」として教育課程に組み込まれていることは、植民地で他民族を支配しようとする者にとってみれば思いがけない障壁だったのかもしれない。英語と同じようにいかにも近代の顔をした「洋裁」だけでなく「和裁」「台裁」があったことは、はたして植民地官僚の意識にどれほどのぼっただろう。裁縫科が支配の障壁（あるいは被支配者のよりどころ）となりうると気付かない支配者もいたかもしれない。発表内容には隔靴搔痒も感じつつ、ボタンの事例は確かに自分の勉強への刺激になった。

諸事情ですべてのプログラムには参加できなかった。懇親会で梶山会員が心のこもった挨拶をされたと聞く。機を逸したのが悔やまれる。最後になってしまったが、大会事務局、宮城教育大学の関係者の皆様、司会をお引き受け頂いた方々と、日ごろ会務の負担を担ってくださる学会事務局に御礼申し上げます。

来年こそは、いやこの先の10年も、可能な限りアプライを重ねるようでありたい。

大会参加記

鈴木 理恵（広島大学）

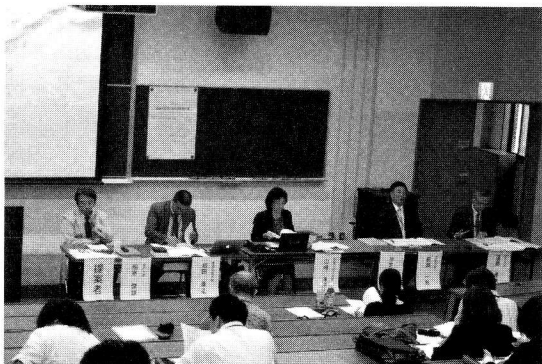
仙台市での大会が第49回（於東北大学）以来10年ぶりに開催された。前回参加したときには、2011年に大震災が起ころうとは思ってもみなかったが、今回訪れた仙台市は表面上その跡を感じさせなかった。

分科会では、時間をかけ史料を博搜して準備された発表からは、学ばせていただき、学問的刺激を与えていただくところがあった。ただ、今年に限らず例年思うことは、発表を工夫してほしいということである。時間は限られている。そのなかで、発表内容の独自性や特徴をわかりやすく伝えてほしい。先行研究との違いを明瞭にすること、個別事例の検証にとどまらず、全体のなかに位置づけて教育史的意義を明示することはもちろんである。また、教育史研究であるからには、歴史学研究の手法にのっとり、史料を提示し、史料に根拠を置きながら論証してほしい。論文になってしまえば見えないような、手の内を明かしながらの発表を聞きたい。学会発表は一回性の緊張をはらんだ場である。論文化したものならいつでも読めるので、学会の場ならではの発表を聞きたいものである。

シンポジウムでは、「教育史研究と教師の教養形成」と題して、日本、東洋、西洋の各方面から報告

があった。それぞれの報告からは学ぶこと、考えさせられることが多かった。「教育史研究は教師の教養形成にどう貢献しうるのか」というテーマ設定の趣旨や、「役に立つ」教育史研究という船寄会員の問題提起は、筆者のように現代教育や教員養成とは迂遠の研究をしている人間に棘のように刺さる。前近代、特に11～12世紀を主たる研究対象としている筆者にとっては、研究と教育の乖離が大きい。しかし、日本列島に学校教員というものが登場してからたかだか150年間程度しか経っていないし、今後も存在し続けるとは限らない。「役に立つ」研究を熱心に進めれば進めるほど、学校教育を肯定し続けなければならないのではないかと危惧する。また、フロアからの意見の時間が30分間程度しかとれなかったのは残念だった。全国各地の教育史研究者が一堂に会する貴重な機会なので、報告を受けてフロアが意見交換する場としての機能がシンポジウムにあってもいいのではないだろうか。

大会2日めの午後は学会を抜け出して、大崎市（仙台市の北部）の旧有備館に行ってみた。有備館は岩出山伊達家家臣子弟のための郷学で、元禄年間に開設されたという。大震災の影響で未だ建物内部に入ることも叶わなかったが、来年4月からは内部が公開されると聞いた。いつか、再び訪れてみたい。



第59回大会シンポジウムの様子

第60回大会(2016年10月1日～2日)のご案内

教育史学会第60回大会は、2016年10月1日(土)・2日(日)の予定で横浜国立大学にて開催することになりました。

不思議なことに横浜国立大学が大会校をお引き受けするのは初めてのことになります。首都圏の大学としてなぜこれまで開催されることがなかったのか、理由はよく解りません。かつてのスタッフだったらどう企画されたのだろうかと夢想もしてしまいます。ともあれ、複数回開催している大学もあるなかで、いくらなんでも、そろそろ年貢の納め時ではないのかとの八紘事務局長のご指摘を受けて決断しました。

会場は教育人間科学部7号館と教育文化ホールなどを予定しています。現在の常盤台キャンパスは40年程前に統合移転によって誕生しました。今年の4月に北門直近の所に都心に接続した相鉄新線の駅が開業の予定でしたが、案の定2018年秋に延期されましたので、今回は横浜駅西口からバスで十数分程ご乗車いただくか地下鉄をご利用いただくことになります。元は1923年に完成したこの国初の本格的ゴルフ場の跡地でした。そこに植物生態学の宮脇昭によって設計された森が広がっています。緑濃き丘ですが、

かなり起伏がありますので足腰を鍛えてくれます。

横浜といいますと、一般的には幕末期の開港による欧米文化の窓口というイメージが強いのですが、別の側面もあります。金沢文庫で知られる南部の六浦(むつうら)は鎌倉に隣接していますが、天然の良港であったことから、中国大陆と直結した玄関口として機能し、鎌倉時代の教育文化の展開に大きな役割を果たしていたことが明らかになりつつあります。この国際性と伝統性という横浜の地域特性も見つめながら、シンポジウムなどの検討を進めているところです。

60回大会という節目の年の役回りですので、いささかの緊張はありますが、教育学人間科学部教員5名と大学院生および周辺の大学等に所属している大学院修了生などの会員で構成される大会準備委員会を発足させました。準備委員一同、多数の会員の皆様のご参加とご発表を期待しております。

第60回大会準備委員会

大戸 安弘(横浜国立大学)



国際化の推進

教育史学会の国際交流活動の現状

荒井 明夫（国際交流委員会責任者・理事）

教育史学会は、近年、国際教育史学会（The International Standing Conference on the History of Education、ISCHE と略）との交流に力を入れてきた。2013年12月（於・京都）、2014年の12月（於・東京）には、エックハルト・フックス（Eckhardt Fuchs、Georg Eckert Institute）会長（当時）と交流する機会をもち、同会長の強力なリーダーシップの下、ISCHE が積極的に組織の改革に乗り出し、多様なワークショップを展開している様子をうかがった。この交流を通じて、教育史学会は、ISCHE に機関会員として入会（2015年9月理事会決定）し、多様な研究交流の機会に積極的に参加することにした。

その活動はすでに始まっている。2013年のフックス会長（当時）との初めての協議の中で、2015年の夏にワークショップ企画があることを知らされ、早速参加することにした。それは2015年夏に「世界歴史家会議」（International Committee of The History of The Second World War）が中国のジーナン（済南）で開催され、そこに ISCHE は東アジア地域における教育史に関するワークショップを開催、日本・韓国・中国の教育史研究者が集合し、研究動向を交流するという企画であった。理事会は、ここに一見真理子理事と新保敦子理事を派遣することとした。両理事は、「日本における東アジア教育史研究の動向と課題」と題する報告を用意され、2014年度教育史学会題58回大会のコロキウムで準備発表をおこない、大会で報告した。その成果は、さまざまな機会を通じて両理事から報告されるはずである。

ISCHE が力を入れているもう一つの企画は、若手研究者へのサポートである。毎年夏に企画されているサマースクールがそれで、旅費は参加者が負担しながら滞在費は ISCHE が負担するものである。詳細は、ISCHE の HP を参照して頂きたいが（<http://www.ische.org/>）、ISCHE を代表する著名な研究者たちによる研究方法・論文執筆等の多様な内容のレッスンが用意され、若手研究者が交流を重ねながら力を付けているようである。

教育史学会が ISCHE の機関会員となったことで、本学会会員も ISCHE のさまざまなイベントに参加しやすい環境が整った。昨年のロンドン大会・今年の

イスタンブール大会はいずれも盛況であったようだ（次年度大会はシカゴ大会）。本学会会員が、こうした環境を活用して積極的に国際交流されることを期待している。

国際歴史学会議（International Congress of Historical Sciences）

第22回中国・済南大会（2015.8.23-29）に参加して

一見 真理子（国立教育政策研究所）

このたび、学会の国際交流活動の一環として、標記大会に新保敦子理事（早稲田大学）とともに参加いたしました。同大会への参加経緯ですが、理事会・国際交流委員会がここ1年半近く、ヨーロッパを本拠地とする国際教育史学会（International Standing Conference for History of Education, ISCHE、漢直訳では国際教育史常設会議、代表はE・フックス・ドイツ・ブラウンシュヴァイク大学教授へ、URL: <http://www.ische.org/>）への加入を検討する中で、初のコラボレーションとして、「2015年夏に中国の山東省済南市で開催される国際歴史学会議の ISCHE 企画枠への参加を教育史学会からもぜひに！」とのお誘いがあったことに始まります。「済南では地の利を生かし、東アジア教育史のセッションを設けるので意義ある交流を」とのお話に、アジア認識を含む教育関係史研究に多少なりとも従事してきた私たちは、ちょうど国際交流委員を拝命しておりましたため、発表の席を確保してもらうこととなりました。

当初聞き及んでいた参加者には、錚々たる日中戦争や植民地教育の研究者のお名前があり、戦後70周年の節目の年のセッションで議論はどのように展開するのか、相当の緊張もありましたが、いざふたを開けると、諸般の事情から参加者が当初の半数に減っ



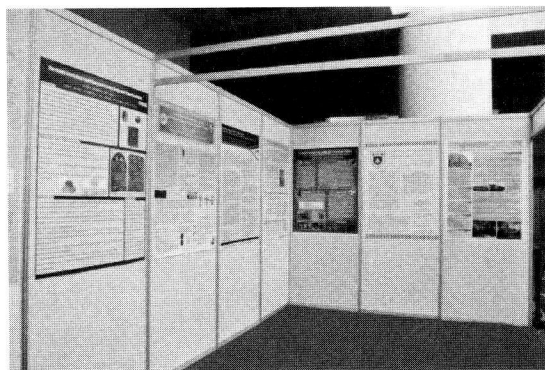
山东大学によるレセプション

たため、フックス会長自らの発議と司会でセッションをひとつに取りまとめ（28日午前中）、韓・日・中の4名の女性研究者による研究報告（話題提供）と質疑応答といった専門的かつアットホームな内容となりました。（発表者とテーマは：Kim Ja-Joong「日本植民地統治下の韓国高等教育システムの形成」、新保敦子「日本、中国、周縁エスニシティにおける対東アジア認識—三者の交錯の観点から—」、一見真理子「戦後日本のアジア教育史研究の動向と課題：教育史学会を中心に」、Kaiyi Li「国際連盟と中国の教育改革（新教育運動）」）。

なお、終了後の交流でわかったことですが、韓国の学会では、同大会参加についてHPにて全会員に向けて募集選考を行っていたとか。チャンスを射止めたのは、博士課程在籍中の若手研究者で、これのみならず若手限定のポスターセッションにも積極的な参加があり、このあたりは、国際交流委員として、近場での貴重な会議について十分な事前の周知活動もしなかったことを大いに反省いたしました。中国・韓国と在外留学中の日本の若い皆さんとの交流で、このような場を踏んでおくことは、研究意欲向上の非常によい刺激となると、増々確信した次第でした。



東アジア教育史分科会の司会と発表者



ポスターセッション会場

このたびの済南大会は、「歴史家のオリンピック」という異名のある会議のアジア初の開催ということで、国家・省・市どのレベルにおいても大変に力のはいったもので、ことにホストの中国歴史学会と山東大学にとっては、20年越しの悲願を実現させるものであったとのことでした。プレ／サテライト企画を含めて2600名規模（海外からは90か国より915名、日本人は約80名）の参加した空前の大会ながら、運営体制もみごとに組織化され、グローバル化の浸透と文字と歴史の国ならではのプライドを感じました。たとえば、本大会に合わせて専門レビュー誌の新規発刊や関連出版が多々あり、大学の国際交流プログラムも歴史文化分野を強化、さらには開催をひとつのテコ入れとして史跡・博物館の整備による歴史ツーリズムの振興を図るなど、人文科学の生き残り戦略もかけた壮大な構想のあったことに驚きます。史学と旅とのコラボが人の移動の盛んな時代の世界的動向であることは、会場の発表テーマの多さからも十分に理解できました。

会期中に私どもは、他の専門分科会＊（人口統計と歴史学、少女の歴史、災害と歴史学、音楽と国家など）や文化プログラム（博物館・史跡見学、書道展参観）も満喫し、会議の後には、儒教のルーツ・山東省曲阜市でのフィールドツアーも併せて実現できました。このように貴重な機会をいただいた教育史学会に感謝申し上げるとともに、この経験が今後の国際交流活動活性化にもつながれば幸いです。（＊ちなみに、旅程の関係で残念ながら傍聴はできなかったのですが、大会全体会のテーマは、「グローバル化の中の中国」「情感の記録の歴史」「世界史の中の革命：比較と連関」「歴史学のデジタル化への転換」の4つであったことを付記いたします。）

第37回国際教育史学会大会に参加して

山崎 洋子（武庫川女子大学言語文化研究所客員教授）

第37回国際教育史学会大会（The International Standing Conference on the History of Education）は、2015年6月24日から27日までの4日間、トルコのイスタンブール大学で開催されました。テーマは“Education and Culture”、サブテーマは、① Cultural paradigms and education、② Agents of intercultural interaction、③ Language and education、④ Religion and education, Symbols, heroes, stories, and myths、⑤ Rituals and routines の5つでした。39の参加国から340人が参加し、323の研究発表、103のセッション、3つの基

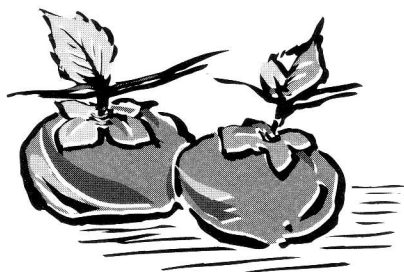
調講演、文化イベント、前日のプレカンファレンス・ワークショップと、実り多い研究交流がなされました。とりわけ、特徴的だったのは、若手研究者が89人も参加したことです。異なった文化、言語、風習、国籍、年齢、研究領域をもちつつ、真摯に教育史研究に向き合う参加者の姿勢からは多くの刺激を受け、また、侵略、支配、戦争といった過去の歴史を乗り越えるための、国際連携の重要性を再確認した次第です。またさらに、イスタンブール大学の院生や助手の方が中心となって、賢明に参加者をもてなしてくださったことも印象的でした。

日本人の参加者はベルリンのフンボルト大学博士課程院生の小林亜未氏と私の2名でした。小林氏の個人発表は博士論文に関わる内容で、“Marching exercises: Synchronization and Political ritual in Japanese and German Schools (1873-1918)”でした。私は、上記②のサブテーマを選び、その下位のタイトルを“Educational tourism and its impacts: Intercultural interaction between Japan and the West at the turn of the 19th to the 20th century”とし、Peter Cunningham (UK) の“Educational pioneering and cultural exchange: the case of Elizabeth Hughes (1851-1925)”、私の“Yasui Tetsu

(1870 - 1945) and transcultural influences in educational reforms for women”、そしてChristopher Frey (USA) の“Oyabe Zen'ichirō and Minority Schooling on Japan's Northern Frontier, 1904-1911”という内容でパネルセッションを行いました。

また、総会では、ロンドン大会 (2014 ISCHE 36 London, England, July 23-26. Education, War and Peace、日本人6名参加)、リガ大会 (2013 ISCHE 35 Riga, Latvia, August 21-24. Education and Power、日本人4名参加) を牽引し、新規約の策定や東アジア諸国の参加に尽力したエックハルト・フックス会長の任期終了にともなう会長選出の議題もありました。新会長は、第59回教育史学会大会総会でも紹介されましたソルボンヌデカルト大学のレベッカ・ロジャースです。

2016年の大会は、“Education and the Body”の下、シカゴで8月17日から20日までの期間、また、博士課程院生向けの英語論文執筆指導サマースクール (宿泊費・食事代無料) もオランダのフローニンゲンで、2016年6月9日から12日までの4日間、開催されます。いずれも申込期限は今年の12月末までです。多くの日本のとりわけ若手研究者の参加によって、国際的な研究交流が活性化されることを願っています。

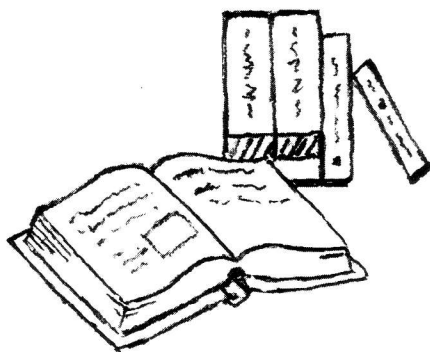


* 図書

- ・平野亮『骨相学—能力人間学のアルケオロジー』世織書房 2015/2/21
- ・松島のり子『「保育」の戦後史—幼稚園・保育所の普及とその地域差』六花出版 2015/5/1
- ・山本和行『自由・平等・植民地性—台湾における植民地教育制度の形成—』国立台湾大学出版中心 2015/5/1
- ・下司晶編『「甘え」と「自律」の教育学—ケア・道徳・関係性』世織書房 2015/5/5
- ・橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想 生命の躍動』東信堂 2015/7/3
- ・小山静子編『男女別学の時代 戦前期中等教育のジェンダー比較』柏書房 2015/7/25
- ・山名淳『都市とアーキテクチャの教育思想—保護と人間形成のあいだ』勁草書房 2015/8/30
- ・石瀧豊美『黒田奨学会の歩み—百年史—』公益財団法人黒田奨学会 2015/9/26
- ・山本正身『伊藤仁斎の思想世界 仁斎学における「天人合一」の論理』慶應義塾大学出版会 2015/10/30

* 紀要・ニューズレターなど

- ・『フェリス女学院150年史資料集第3集 RCA 伝道局報告書に見るフェリス』フェリス女学院150年史編纂委員会 2015/3/15
- ・『玉川大学教育博物館紀要』第12号 玉川大学教育博物館 2015/3/31
- ・『筑波大学教育学系論集』第39巻 筑波大学人間系教育学域 2015/3/31
- ・『中央大学史資料集』第27集 中央大学史料委員会専門委員会 2015/3/31
- ・『大学教育学会誌』第37巻第1号 大学教育学会 2015/5/30
- ・『フェリス女学院資料室紀要 あゆみ』68号 フェリス女学院資料室 2015/6/15
- ・『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第79号 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要編集委員会 2015/6/22
- ・『大学教育学会誌』第37巻第1号 補遺 大学教育学会 2015/6/30
- ・『戦傷精神障害兵員の戦中・戦後』清水寛 2015/7/20
- ・『仏教教育ニュース』No. 46 日本仏教教育学会 2015/8/15
- ・『玉川大学教育博物館館報』第13号 玉川大学教育博物館 2015/8/31
- ・『大学教育学会ニューズレター』No. 100 大学教育学会 2015/9/18



事務局からのお知らせ

1. 「教育史学会メールニュース」の創設について

教育史学会では、会員に向けた迅速かつ能動的な情報伝達手段として、メールマガジン「教育史学会メールニュース」を創設することとし、発行準備を進めております。

学会にメールアドレスを届け出ている会員には、準備が整い次第、「メールニュース」を送信させていただきます。詳細なスケジュールは学会ホームページにてお知らせいたしますので、ご確認ください。

「メールニュース」の配信を希望されない場合には、「メールニュース」内に記載の「配信停止」操作方法に従いご自身でお手続きいただくか、事務局までご連絡をお願いいたします。

また、メールアドレスをお届けいただいていない方で「メールニュース」の配信をご希望の場合は、事務局までメールアドレスをお知らせいただきますようお願い申し上げます。

2. 会費納入のお願い

2015年9月より第59回大会年度がスタートしております。11月15日時点で会費を納入いただいていない会員には、払込用紙を同封させていただきました。過年度会費に未納がある方には、未納分も合算して請求させていただきます。会費のすみやかな納入にご協力ください。

なお、年会費は「ゆうちょ銀行」（郵便局口座）からの自動引き落としにより納入できます。次年度より自動引き落としをご希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りいたします。

3. 会員登録について

現在、次の方々が住所不明となっています。お心当たりの方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報くださるようお願いください。なお、会員登録内容の変更は、ご本人からのお申し出によってのみ可能となります。

青山 鉄兵 遠藤華奈子 (敬称略)

4. 会員登録変更等について

引っ越しでご住所が変わられた場合や、勤務先を変更された場合など、学会にお届けいただいている連絡先に変更が生じた場合は、忘れずに事務局までご一報ください。

2015年11月
学会事務局 八鍬 友広

教育史学会 会報 No. 118 2015 年 11 月 25 日

編集・発行 教育史学会事務局 八鍬友広
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科
八鍬友広研究室 気付
電話 022 (795) 6117
電子メール mail@kyouikushigakkai.jp
郵便振替口座 00140-0-552760 教育史学会事務局

印 刷 城島印刷株式会社